

離島活性化の取組み ～ 長崎市の離れ島 “高島” ～

はじめに

長崎県には大小596の島々（うち、有人島は74）があり、その数は全国で最も多い。そこに住む人々は、1960年（昭和35年）をピークに年々減少しているとはいえ、現在でも県人口の約1割超（2005年国勢調査による）を占めている。本県にとって島々の活性化は引き続き重要な課題となっているが、厳しい財政事情の下では離島振興に向けた財政支援にも自ずから限界がある。

このような状況の下、県内の島々においても地元の有志を中心に、単に行政に頼るばかりではなく、自らの手で地域の特徴を活かし工夫を凝らした独自の“島おこし”を推進していこうとの気運が高まり、既に一定の成果を上げつつある事例も見受けられる。本稿では、それらのなかから炭鉱閉山後人口が激減し過疎化が急激に進行している長崎港外に浮かぶ島「高島」における“島おこし”の現状と課題をとりまとめた。

1. 高島の概要

（1）歴史

長崎市高島町は、長崎港の南西約14.5kmの海上に位置し、^{たかしま}高島、^{とびしま}飛島、^{なかのしま}中ノ島、^{はしま}端島（通称：軍艦島）の4つの島々からなり、2007年現在、高島だけが有人島である。高島に人が住みはじめたのは、1185年（文治元年）頃といわれており、1695年（元禄8年）、五平太という人物が石炭を発見したことで「石炭の島」としての歴史が始まった。

高島の“基幹産業”としての石炭採掘は、1710年（宝永7年）頃に佐賀藩・鍋島領の深堀氏により事業化されたことに始まる。そして幕末の1868年（慶応4年）に軍備費調達を企図した佐賀藩とジャーデン・マセソン商会代理人を務めるトーマス・ブレーク・グラバー氏との合弁事業となり、翌1869年（明治2年）には深さ40M超の立坑が掘られ、蒸気機関を用いて石炭を採掘するという日本初の近代洋式立坑『^{ほつけいせいこう}北溪井坑』を開坑、本格的な操業が開始された。その後1881年（明治14年）には三菱の岩崎彌太郎氏の経営となり、この石炭の利益で膨大な富を築き事業を拡大していったため、高島は三菱発祥の地とされている。

また、高島から南南西約4.5kmに位置する端島でも、1810年（文化7年）の石炭発見以降、佐

賀藩・鍋島氏により細々と石炭の採掘が行われていたが、1890年（明治23年）に三菱の所有となり本格的な採炭が始まった。そして、端島は最盛期の1960年（昭和35年）には人口が5,267人となり、当時の東京都の9倍という世界一の人口密度を誇る“高層住宅の建ち並ぶ都市”にまで発展した。

このように、明治から昭和にかけて日本の近代化を支えてきた石炭産業により両島は繁栄を極めていたが、国の石炭から石油へのエネルギー転換政策により、国内炭鉱が次々に閉山していきなかで、まず端島が1974年（昭和49年）に閉山して無人島となり、続いて1986年（昭和61年）には高島も閉山し105年間の“石炭の島”としての歴史に終止符を打った。

その後、「石炭を魚にかえて島おこし」をキャッチフレーズに磯釣り公園などの施設整備を行い、石炭の町から観光の町へと転換を図り現在に至っている。2005年（平成17年）1月に長崎市と合併するまでは「西彼杵郡高島町」として、面積・人口ともに日本で最も小さな町であった。



高島町位置図（Mapion地図より当研究所にて作成）

（２）産業

長い間、高島は三菱の“城下町”として石炭を唯一の産業としていたため、炭鉱を失った影響は大きく、現在は島を代表するような基幹産業はとくに見当たらない。産業分類別で島内の就業者数をみると、農林水産業や製造業といった第一次・二次産業の就業者は元々少ない上に減

少傾向が顕著であり、サービス業に代表される第三次産業に集中している（図表1）。

また、島内にある主要な事業施設としては、ヒラメやシマアジなどの稚魚養殖を行っている長崎市水産センターの高島事業所や、島の特産品となった「高島フルーティートマト」を生産している崎永海運(株)の高島トマト事業部がある程度。

図表1 国勢調査における島内の産業分類別就業者数

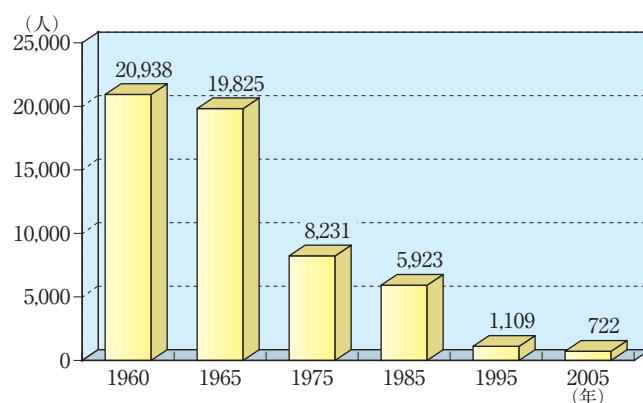
産業分類	1995年	2000年	2005年
就業者総数	350	305	298
第1次産業	40	27	24
農業	10	7	4
水産業	30	20	20
第2次産業	85	55	46
鉱業	1	0	0
建設業	57	36	28
製造業	27	19	18
第3次産業	225	223	227
電気・ガス・水道	5	2	1
運輸・通信	23	21	14
卸・小売業	60	45	38
金融・保険業	8	7	3
不動産業	1	1	1
サービス業	77	98	146
公務	51	49	24
分類不能	0	0	1

※当研究所で作成

（3）人口

炭鉱閉山（1986年）により島の経済が崩壊したため、最盛期20千人以上だった人口は2005年現在、700人台にまで激減している（図表2参照）。

図表2 高島町人口推移（国勢調査より）

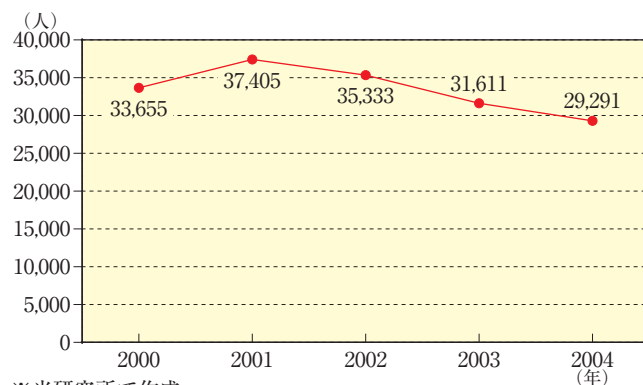


※当研究所で作成

（4）来訪者（観光客）数

美しい海に囲まれた自然豊かな離島の特徴を活かし、1997年（平成9年）に「飛島磯釣り公園」と「高島人工海水浴場」、1999年（平成11年）に「ふれあいキャンプ場」、2003年（平成15年）には「海水温浴施設 いやしの湯」を相次いでオープンし、年間約3万人が同島を訪れている（図表3参照）。

図表3 高島観光客数（県観光統計より）



※当研究所で作成
（なお、2005年以降は長崎市との合併により統計なし。）

2. 高島活性化の取組み

炭鉱という大きな雇用の場をなくした高島では、長崎市の行政センター（旧高島町役場）が島内最大の職場となり、企業（三菱高島炭鉱）依存の島から行政依存の島へと変貌し、人口が減少した上に高齢化率も50%近くに達し（長崎県平均は23.6%）、過疎化が進行している。

現在、この過疎の島「高島」を活性化させるために民間団体や行政によるさまざまな取組みが行われている。

（1）高島活性協議会

2004年5月に島民有志で発足した高島活性協議会（野崎祐一代表 他5人）は、06年度「高島を知ろう」、07年度「高島をトライしよう」、08年度「本格的な事業展開」と目標を定め、島の活性化を図っている任意団体であり、これまでに島の交流人口増加に向けてさまざまな取組みを独自に展開してきている。そのメンバーのなかには、一旦、島を離れていた人もおり、島外から見た高島の魅力や問題点などを客観的に認識できることを強みとしている。

当協議会は、単に島へ人を呼び込むだけでなく「島に働く場所がなければ自分たちでつくりだす」をスローガンに、若者が島外に流出しないよう雇用の場を新たに創り出すことに主眼を置いている。また、閉山後稀薄化が目立つ住民同士のつながりを修復し、高齢者を中心とした島民の生活に役立つような団体となることを目指して活動している。

（2）活動内容

①軍艦島・高島巡遊

現在、高島活性協議会（以下、協議会）が行っている事業の中核をなしているのが『軍艦島・高島巡遊』である。これは、2006年に行われた「長崎さるく博」のコースにも組み込まれ、当初9回の実施を予定したところ、予想を上回る人気コースとなり、最終的には50回以上実施され、人口約700人の島に延べ500名が来島するなど相当の集客効果をもたらした。2007年も昨年のさるく博には及ばないものの好調を維持しており、現在の高島観光を牽引する役割を担っている。



高島からみた軍艦島（端島）

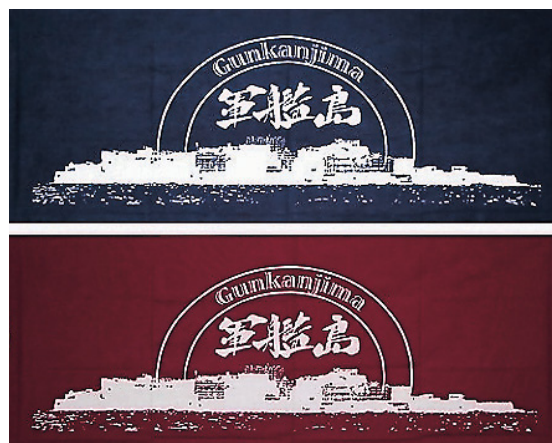
②特産品や関連グッズの販売

高島の特産品については、旧株高島グリーンファームが1989年（平成元年）より生産していた「高島フルーティートマト」（現在は、崎永海運株が生産）を利用した羊羹などがあったが、これまで島外に向けて大々的にアピールされたことがなく、その存在はあまり認知されていなかった。そこで協議会では、崎永海運株の協力を得て新たに開発した「高島フルーティーとまと羊羹、ゼリー、ジャム」の3商品を高島港の観光案内所で販売している。

またこれに加え、「軍艦島手拭い、Tシャツ」など、軍艦島に関連したグッズも販売し、高島の認知度を高めることに努力している。



高島フルーティーとまと羊羹



軍艦島手拭い
(ホームページ「GUNKANJIMA ODYSSEY」より)

③「ロハス」の島

2006年7月、協議会の野崎代表は新たな取組みとして長崎県内の他の民間団体と協力し高島アートアイランド事業を開始、同年11月には「映画・アート・写真展」を初めて開催した。本事業は、高島をロハス（^{ロハス}LOHAS=Lifestyles of Health and Sustainability の略語で、健康と環境、持続可能な社会生活を心がける生活スタイル）の島と位置づけ、芸術・文化面とともに豊かな高島の自然を活用し、島の交流人口を増やそうとする試みである。

アートによる島おこしの代表的な事例としては、しばしば愛知県の三河湾に位置する一色町佐久島（人口約300人、高齢化率約50%の島）が挙げられる。佐久島は、リゾート開発計画がバブル崩壊で頓挫したことを受け、アート関係者と島民が互いに知恵を出し合い、「祭りとアートに出会う島」をテーマに展覧会やワークショップなどのイベントを行い、“アートの島”というイメージを全面的に打ち出すことで年間観光客数が高島を1万人上回る約4万人の島となった。

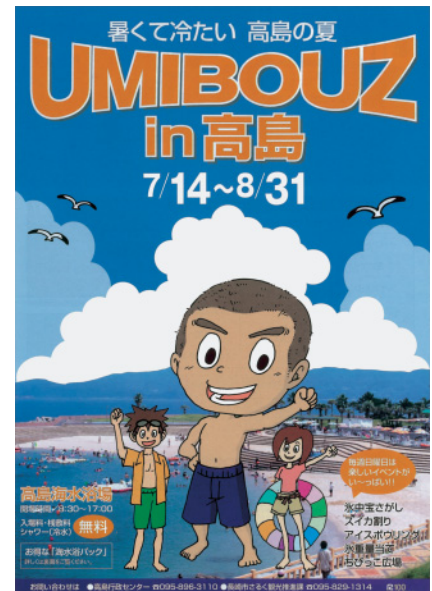
これに対して高島の場合は、“ロハスの島”のイメージを打ち出し、アートに限らず島の自然や人との共存、すなわち「自分で作った野菜や自分が獲った魚貝類を食べ、島民と声を掛け合い生活する」という“市街地近郊で精神的な充実感を味わうことができる島”を標榜している。島

民の方から観光客に気軽に声をかけ、交流が広がっていくこともロハスの一面と考えており、地元住民と訪れた人との「ロハス」を共感できるような島づくりを目指している。

④既存イベントの運営

協議会のメンバーは、自分たちが新たに手がけているイベントだけではなく、従来からの継続イベントにも積極的に関わっている。特に、離島である高島が最も輝く季節となる夏場には、「日本の水浴場88選」にも選ばれている美しい海水浴場で毎週日曜日に催されるイベント「UMIBOUZ in 高島」(注)の裏方活動に参加したり、バーベキューセットや台座つきテントを備えている「ふれあいキャンプ場」の管理なども行っている。

(注) 石炭の町から観光の町への転換を図るべく旧町時代に開始。合併後も引き続き長崎市が支援しており、高島の夏の風物詩として定着している。

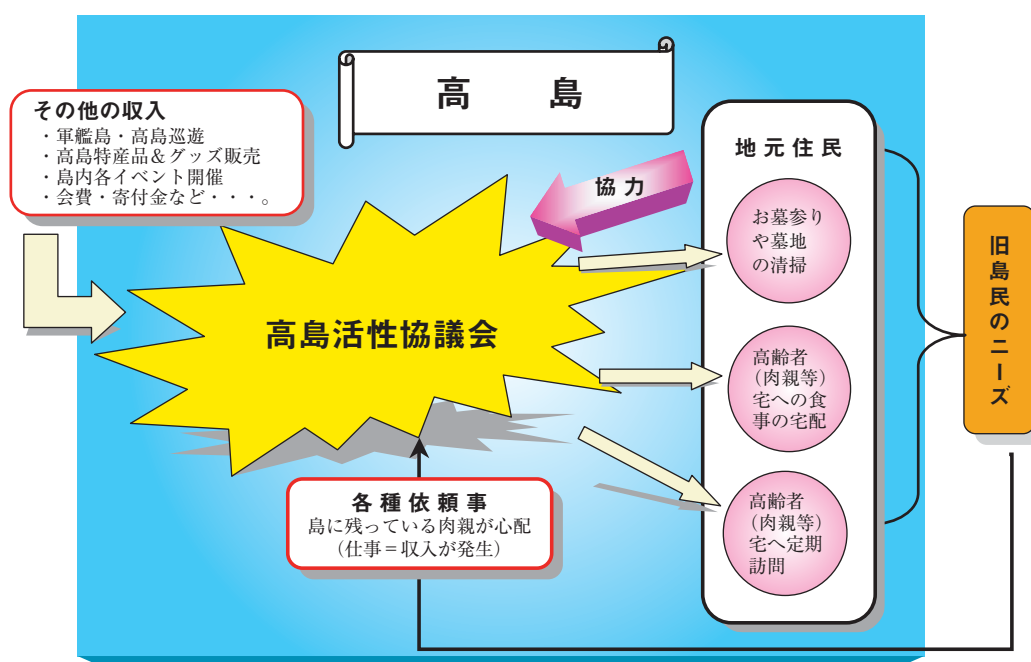


2007年「UMIBOUZ in 高島」

(3) 雇用の場をつくりだすビジネスモデル

このように、協議会は高島の交流人口拡大に向けてさまざまな活動を行っているが、もう1つの重要な目的「島に働く場所がなければ自分達でつくりだす」を実現するため、島民（とくに若者）に雇用の場を提供出来るようなビジネスモデルを検討している（図表4）。

図表4 高島活性協議会を中心としたビジネスモデル（案）



※当研究所で作成

なお、現在島内には24人の小中学生（2007年5月現在）がおり、長崎港ターミナル内に備え置く観光チラシを作製したり、市の広報紙「広報ながさき」に地元記事を執筆するなど、積極的に島おこし活動を展開している。当協議会の野崎代表はこうした生徒たちの取組みを高く評価しており、「将来、この子供達が優秀な地域リーダーとして、少しでも多く島に残れるよう、受け皿づくりに努力していきたい」と語っている。



(中面)

一方、高島の隣の伊王島では既に県外からのU・Iターン者の受入れに一定の成果を上げているが、これには長崎市が進めている「ながさき暮らし」推進事業^(注)により、農地付き定住住宅

用地が島内に整備されたことが大きく寄与している。この市の支援策は農地付きが基本となっていることから、農地がない高島では伊王島と同じような定住策を推進していくことは困難である。高島の活性化はこのような制約の下で企画し、取り組んでいかなければならなかったのである。

上述のような高島活性協議会のビジネスモデル、すなわち観光客の誘致など一般的な交流人口増加策にとどまらず、過去に大勢いた旧島民を主たるターゲットとして着目し、これら旧島民や地元住民のさまざまなニーズに応え、それをビジネス化することにより島の若者に仕事を提供するというアプローチには、同様に過疎で悩んでいる他の島々にも応用可能な要素が少なからず含まれているといえよう。

(注) 長崎市では、2006年4月より、長崎での暮らしを希望する「団塊の世代」や、Uターン希望者など、県外在住者を対象に長崎での暮らしを勧める「ながさき暮らし」推進事業を開始しており、市役所企画部・総合企画室内に『ながさき定住支援センター』を設け、U・Iターンを支援している。

その対象地区は長崎市と合併した旧町7地区（琴海、外海、香焼、伊王島、高島、三和、野母崎）で、これまでの問合せは外海地区・琴海地区を中心に257件（2007年3月末現在）に上る。高島と同じ離島である伊王島には農園付き住宅用地が5区画整備されており、2007年3月現在、5区画全ての契約が完了している。

とくに、高島の場合には「何もないので、何でもありの島。今から何でもつくりだす（高島活性協議会）」と、何もないことを逆手に取って活動している。こうした協議会の前向きな姿勢に加え、かつて“炭鉱”という唯一の産業に頼り栄枯盛衰を辿ってきた歴史的教訓をもとに、高島を1つのイメージで売り出すのではなく、軍艦島やトマト関連商品、それにアートやロハスなど多様な魅力を積極的にアピールし高島の活性化を図ろうとしている。これにより例えば、海水浴や釣り客が減少しても軍艦島巡遊がある、軍艦島巡遊の人气が落ちたとしてもロハスがある、またトマトもあるといったように、1つの施策が勢いを失っても、島外に多彩な魅力を発信していくことで、来島者の減少を最小限に止めることができる。そして、これまで一過性のイベントが多く単発的な集客に頼っていた島を、年間を通してリピーター客が訪れる島へと変え、交流人口の拡大につなげることができると考えられる。

また当協議会は旧島民やその家族などを集客対象として重視しており、このため例えば、現在も有効な活用方法を見いだせずにいる「旧炭住」についても、旧島民にとっては、風呂はなくともかつて住んでいた懐かしい住居であることから、これを短期滞在用宿泊施設として活用することを検討している（なお、「軍艦島・高島巡遊」では、軍艦島の当時の生活の雰囲気味わってみたいという観光客の要望に対して「旧炭住」の一部を公開している）。

また一般に地域活性化を図るうえで、まずその地域にしかない Only One を探し出しアピールすることが重要、とよくいわれている。この点、「軍艦島・高島巡遊」として人気を呼んでいる軍艦島も、かつては、単なる廃墟で朽ち果てていく島としか認識されず、誰もそれを活用しよう

などとは思いつかなかったものであり、住民が地元の価値に気付かなかった典型的な事例といえよう。この軍艦島は2008年から長崎市により上陸が許可される予定（危険なため、現在は上陸禁止）となっており、また、世界遺産への登録候補として2006年に文化庁に申請された「九州・山口の近代化産業遺産群」のなかにも含まれていることから、今後軍艦島クルーズは高島のみならず長崎の代表的な観光コースの1つとしてさらに認知度・集客力を高めていくと期待される。同クルーズの発着地でもある高島としては、このチャンスを行政と一体となって有効に活かして行く必要がある。

（杉本 士郎）